

穴性問題の討論の呼びかけ

——黄龍祥氏の問題提起の意味するもの

2012年9月に開催された日本中医学会第2回学術総会のパネルディスカッション「日本に根付いてきた中医針灸」の討論のなかで、座長の篠原昭二先生が、北京の中医科学院の黄龍祥氏の論文「腧穴主治的規範化表述」について、「みなさんは、どう考えられますか」と質問をされました。このたび、誠心堂薬局の趙貞華先生が自主的に同論文を丁寧に翻訳してくださいましたので、ここにご紹介いたします。

黄龍祥先生の論文「腧穴（ツボ）の主治の表記をいかに標準化するか」

この論文は重大な内容を含んでいます。

過去、日本の中医針灸界では、一貫してツボの穴性（効能、作用）を重視し、これを針灸の弁証論治の核心とみなして、日常臨床に運用してきました。これまで来日して講義をしてくれたすべての老中医たちはこの穴性を重視し、弁証論治の針灸を教えてくださいました。特に「李世珍の針」は、穴性を重んじ膨大な臨床経験の裏付けのうえに、穴性をまとめあげました。それが『臨床経穴学』（李世珍著 東洋学術出版社出版）です。本書以外にわれわれが学んだほとんどの書籍が穴性を土台とした弁証論治体系を強調していました。しかし、いま黄龍祥氏は、これを根底から否定する異論を提出しています。つまり穴性は中医の薬性理論をそのまま持ち込んだものであって、針灸臨床の実際とは相容れない。このために実際の臨床とはかけ離れた無理な体系を押しつけてきた、と批判をしています。また、黄龍祥氏は本文で述べられた観点にもとづいて中国における腧穴主治の標準化を押し進めていると述べています。つまり、中国での今後の針灸の標準になる可能性があります。ことは非常に重大です。

はたして、黄龍祥氏の観点が正しいのか。それとも問題があるのか。

まず黄龍祥氏自身の論文の意味を理解し、いわんとする内容をきちっと把握しなくてはなりません。そのうえで、数十年間実践を重ねてきた日本の臨床経験を総括して、活発な議論を展開する必要があると考えます。積極的なご意見をお願いいたします。

学会ホームページでは、「穴性問題検討コーナー」と題するコーナーを設け、討論の場を提供しています。皆さんの様々な見解を公開し、継続的な議論が行

われることを期待します。同コーナーでは、中国で議論されている穴性関係の論文、及び日本で発表された論文、穴性に関する資料を収録しています。

皆様のご意見はこちらのメールアドレスまでお送りください：

info@jtcma.org